

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福社会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成27年 11月 第177号 年間購読料1,000円 (1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

『職業としての介護の専門性を求めて』

—ピンピンとコロリの間を懸命に生きて次の世代に—

「病気になりたくない、病気を治したい、健康で暮らしたい、少しでも長く生きていたい」。『命と健康』への願望に応える医療の『専門性』が無限とも思える程に進展して来ました。かつては70才で「古希」と言われていた時代から、今では100才も「希」ではなく、0才の子の平均余命が80年～90年となっています。

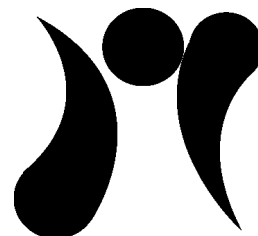
そして新たに開発された医療技術の成果もあって、「完治はしないが病と付き合いながら生きる時間」、即ち「死を意識しながら要介護で生きる時間」が確実に長くなっています。「ピンピン・コロリが老いの理想」と言いながらも、現実にはピンピンとコロリの間が存在する要介護の期間が、『平均して10年程』も確保されているのです。かつては短期間を家族のみで世話して看取った老いの営みが、10年という長い時間を核家族化した少人数で世話することは困難となり、「介護の社会化」を目指して介護保険制度を創りました。『介護』を、職業として確立する必要性が生じて来たのです。

人が老いて要介護となり『死を予感』する時、その身を仲間に委ねるのは人間の最も基本的な『本能』であり、次の世代に社会を引継ぐ為の『宿命』であり『使命』です。数ある動物の中で人間のみが、仲間の中で最期を迎え、人間固有の『思想と社会性』を「介護と看取り」を通して伝え、社会を引継ぎ、歴史を続けて来たのです。

ピンピンとコロリの間は、遺伝子では伝わらないものを伝える、人間にとって重要な時間だったのです。現在ではその最期を迎えるまでの10年程の暮らしを支える重要な役割を「職業としての介護」が担います。

鷲田清一氏は10月4日付朝日新聞朝刊「折々のことば」の中で、『死は、一個のいのちの消失に尽きるものではない。土が生き物の死体を腐らせることで植物を育むように、人の死も「大きな自然の摂理にくるまれたもの」としてあるはず。』と書かれています。

自然界にとっても、人間社会にとっても、「死は新たな命を
(次ページへつづく)



(前ページのつづき)

育む創造的な営み」だと、氏は言われます。地域包括ケアシステムにおいて『医療と介護の連携』が最重要課題と言われます。『願望と現実と未来』をつなぐ包括的な仕組みの中で、次の世代に社会を引継ぐ為に、願望に応じて『生の可能性』を支える医療と、現実を踏まえて『死の創造性』を支える介護とが、対等な立場で連携し合える関係が求められています。『現実と未来をつなぐ死の創造性』を支える介護の使命は重大です。

「団塊ジュニア」と呼ばれる人達が生れてから40年、「長命と少子」の傾向が一貫して続いています。平均寿命が延び続けるその一方で、出生児数は減り続けて、200万人から100万人に半減しました。「高齢者の生」の可能性が拡大する一方で、「新たな命の誕生」が減少するという、極めて不自然な状況が続く、「幸福度の低い社会」になっています。高齢者の暮らしを支援する際には、次の世代に引継ぐ役割を視野に入れて、『生の可能性』と『死の創造性』を『等分に支える』事が重要ではないか、と痛感します。

予防重視型といわれる介護保険制度においては、「何歳に成ろうとも死を避ける努力」を最優先する「世間の倫理観」が前面に出て『生の可能性』に重点が置かれ、『死の創造性』が見失われて来たように思います。その様な背景の下にあって、東京都世田谷区立の特養「芦花ホーム」で医師として務める石飛幸三先生が『平穏死のすすめ』を出版されて以降、多くの施設や在宅の介護現場で『死生観』を問い『平穏な死』を望む声が生れて来ました。そしてNHKスペシャルで、今年9月20日に『老衰死』を巡る日本と世界の状況が放映されました。

日々の業務の中で『ご利用者の死』と直接向き合う介護職が、『大きな自然の摂理にくるまれた老いと死の営み』に接して、人生最後の自己実現に命を輝かせる尊厳ある姿に気づき、穏やかな死顔に出逢って癒しを感じ、『死に宿る創造性』を悟って思想を育み、自らの『専門性』を養い、『地域で実践』する時が来た事を痛感します。

要介護の身を他者に委ね、『死を予感しながらも懸命に生きる』お年寄りの姿に『命の輝き』を視る感性・感覚を忘れず、その懸命な老いと死の営みとの出逢いで『癒しと歓び』をご家族や地域の人と共有したい、と切に願います。

『死んだらお終い』ではなく『死後に続く物語に創造性が宿る社会』でこそ、要介護や認知症の人・ダウン症の子らも含めて『如何なる人の生』も、『命が輝く充実した営み』に成り得て、社会に『幸福感』が広がるのだと思います。

空の雲に、夜空の星に、春に芽吹く草や木に、そして懸命に生きるお年寄りの姿とその後の『穏やかな死顔』に、『新たな命を育む創造性』が宿る事を心に刻み、やがては訪れる『我が身の老いと死』に備えたい、と心より念じます。

せいりょう園 渋谷 哲

【せいりょう園空き情報 平成27年11月18日現在】

- ① ケアハウス：2室（バス・トイレ・キッチン付24㎡）
- ② グループホーム：空きなし
- ③ グループホームまどか：空きなし
- ④ サービス付き高齢者向け住宅「リバティかこがわ」：5室
- ⑤ サービス付き高齢者向け住宅「自愛の家さくら」：空きあり

【問合せ先】 せいりょう園 TEL(079)421-7156 / (079)424-3433

H・Iさんへ 『ありがとう!!』



せいりょう園訪問看護ステーション
藤井 知子

「14年と5か月」これは私がHさんと関わった月日であり、また私が正職員として働いてきた期間でもあります。Hさんが亡くなられ今までの記録を整理して、その分厚さに改めて月日の流れを感じています。

Hさんは平成11年11月にケアハウスに入居され、その翌月より訪問看護を利用されるようになりました。私が担当になったのはその約1年半後の平成13年5月です。その頃のHさんはとてもおしゃれで、いつもスラックスにニットのアンサンブルといったおでかけスタイルでした。ほぼ毎月美容院に行き、2か月に1度はパーマをあてていました。女性として見習いたいと思いました。

ピアノ教室や園の様々な行事にも積極的に参加され、居室では野球観戦を楽しみ、友人との散歩を日課として、ケアハウスでの生活を楽しまれていたように思います。

この頃私は居室での入浴介助を主とした訪問をしていましたが、徐々に下肢筋力の低下がみられるようになり、デイサービスでの入浴、さらに小規模多機能登録へと変わっていきました。小規模で久しぶりに入浴介助をする機会があり、いぜんのように次々とかけ湯をしていると「久しぶりに豪快に入れてもろた」との言葉、二人で大笑いしました。

Hさんはパンが大好きでした。「寝られなくて、むしゃくしゃしたからパン2個食べた」と夜中にパンのやけ食いをすることもありました。

娘さんの来訪を心待ちにしており、持参されるコロッケや稲荷寿司やモンブラン、ときには居室で焼き立てのステーキを楽しまれることもありました。嚥下状態が少しずつ悪くなっていた時も好みの物は、むせずに食べることができていました。これは他の方にも同じことがみられ、普段はトロミ付きやキザミ食でもむせる方が、好きな物はそのままむせずに食べられます。大好物を知ることは大切だと思います。

Hさんとの一番の思い出は散歩です。平成19年の春ごろから車椅子で出かけるようになりました。そめいよしの・八重桜・つつじ・バラ・紫陽花・ひまわりと季節の花を楽しみ、玉ねぎ・かぼちゃ・なす・トマト・すもも・柿・みかん・白菜・大根と畑の作物で季節を感じました。時には常務や副園長から果物や花をいただくこともありました。「風が気持ちいい」「きれいなあ、気持ちがなごむわ」と穏やかな表情で話されていました。

平成23年頃からは「来年も桜みれるかわからんからなあ」との言葉が聞かれるようになりました。今年4月に桜を見たのが最後となりました。

その後、5月・7月・8月と脳梗塞を繰り返しましたが、以前からのご本人の希望通り入院することはありませんでした。短期間の点滴と並行して経口摂取を勧めていくと、水分・食事ともにある程度摂取できるようになりました。娘さん・職員ともにHさんの力に驚かされました。

8月の再梗塞では点滴も難しくなり、娘さんから「もう点滴をうけつけなくなったという事ですね」との言葉がありました。少しの水分と時々食べるチョコレートムースで20日間すごされたHさん。ふくよかだった身体は小さくなり、身体の全てを使い切り9月28日に亡くなられました。

食べたいものを伝える事、今はいらないと言える事、感謝の気持ちを伝える事、亡くなられる5日前まではHさんからの意思表示はしっかりありました。娘さんも職員も本人の意思を確認し、それを尊重して寄り添いました。

娘さんは「傍にいる事しかできない」と言われていました。傍にいること、それだけで十分だと思います。

Hさんとは溢れんばかりの思い出と、気づかされることがたくさんありました。今まで何百回と言っていた「ありがとう」の言葉、最期に私からHさんに『ありがとう!!』



平成27年10月18日（日） RUN伴2015

「RUN伴」は、全ての町が認知症になっても安心して暮らせる地域を目指して、認知症の人や家族、支援者、一般の人が少しずつリレーをしながら、北海道から福岡県まで1つのタスキをつなぐ列島リレーです。今年で5回目です。

5年目の今年は、せいりょう園と地域のボランティアの方がたも沢山参加して「認知症カフェ」を開きました。お揃いのオレンジ色のTシャツを着て啓発活動を行います。

垂れ幕にあるように、地域で互いを認め合い「認知症の人と家族にやさしい街 加古川」を目指していきたいです。



参加した皆さんに石焼き芋を振舞う為にごしらえを行う。



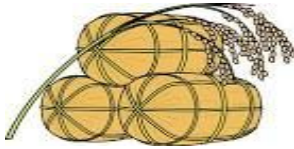
10時30分頃、せいりょう園をスタート。声援に後押しされる。



約3.5kmを走り、加古川市総合福祉会館にゴール!!



加古川市長・はばたん(兵庫県マスコットキャラクター)と共に皆で記念撮影。



他人の釜の飯

地域密着型特養 介護職員 児嶋勉

せいりょう園に勤める前に東京・大阪で33年ほどサラリーマンをしていました。新卒で入社した会社は、30年勤めてリストラのため退社し、その後、知り合いの会社にお世話になっていました。

1社目では、1000億円の借入をしてしまい、リストラの一環の施策の立案と実行をしました。その時の上司は、銀行から出向してきて会社再建に辣腕をふるっていました。その上司と仕事をしていくようになって全く過去の経験が役に立たないことを悟りました。40歳になって「他人の釜の飯」を食べることになったのです。

当時は1週間、1ヶ月、6ヶ月の長短期やるべきテーマがあり、レポートの提出を必要とされていました。人生で初めて悪い頭なりに「脳みそが汗をかいている」感じがしました。このときを思い返して「二度と戻りたくないけれど、大変いい経験ができた」と思っています。40歳にもなると過去の経験値から手の内でこなせる事が多くなるのですが、全く経験が通じない仕事、部署は大変だと思いました。その後、統合会社での主導権争い、経営陣の現状認識の錯誤による迷走、転落を目の当たりにして感じたことがあります。役員になった方は、従来の営業成績が優秀でなられていてその道のプロです。が、過去の延長線上に将来がない、時代の大きな変革期に対応できていませんでした。「過去のプロが、将来のプロであるかどうか分からない。」ということです。

再リストラされる前に新生の子会社に一時期転籍していました。新生会社になって2人の社長につかえました。その一人の方に言われたことを思い出します。「生き残るのは強い者ではない。変化に対応できる者である。」とその方は安宅産業の倒産時に収益部門の生き残り、事業継続案を立案し銀行と折衝した経験をお持ちでした。私のことを理解して頂いた唯一の先輩だと思います。彼もまた「他人の釜の飯」を食べた方でした。

1社に勤めていますと、その会社の企業文化が一般社会常識になってしまうことが多いです。会社の成長期には、それでもかまわない時もあるかと思いますが、いったん社会変革とズレが生じたときに問題が発生します。昨今の東芝の問題もそうでしょう。問われているのは企業体質です。法人は人と同じく年をとると体質の変化がどうしても起きます。個人的に対応することが最も難しい問題です。

全く違う仕事である介護職は経験の通じない世界ですが、なんとかやっけていこうと考えています。せりょう園で感じることは利用者様の変化の観察や対応が大切であること。一人で全てを観察できないのでチームでの対応となり、職員間のコミュニケーションが重要だと感じています。仕事の慣れから来る気の緩みも注意していこうと思っています。

石焼き芋



各部署で焼き芋を楽しみました。

熱くなった石の上にアルミホイルで巻いたサツマイモを入れ、出来立て熱々の焼き芋を、フーフーしながらホクホク、モリモリ食べました。好評でしたので、また行いたいと思います





真宗 大谷派 光念寺
本多 正尚 住職

デイサービス 谷澤 高明

久しぶりに郊外に車を走らせると一気に秋の深まりを感じる。季節は静かになってきたが、世間では著名企業や公共機関幹部の『お詫び』記者会見が続く。清水の舞台から飛び下りる覚悟の一大決心をして、一生に一度の買い物をした物件に不具合が発覚し大問題になっている。「徹底的に調査し、再発防止に努めます」どこのトップも判を押したように繰り返す。しかしこれまで、その原因と責任の所在、そして対策が明確にされた例はほとんど記憶にない。いろんな不正(手抜き工事、データ改ざん)が組織の上層部に本当に伝わっていなかったのだろうか。もしそれが本当ならその組織は組織として機能していない、死に体である。そういう組織だから、事が起こっても「わしゃ知らん。聞いてない」。とにかく頭を下げてホトボリがさめるのを待とう。そこへ行くと昔のトップは不祥事が起こっても易々と頭を下げたり、謝ったりしなかった。子供心に「何だ!このオヤジは」と腹もたてたが、今考えると彼らは組織の中心にいて、少なくとも自分の心の中では全体を把握している自負があったからではないだろうか。従ってなかなか事実を受け入れられなかった。信じられない。こんなミスが生じるはずがない。ウチは大丈夫。だからなかなか頭を下げたり、謝ったりしなかったのではないだろうか。しかし今は組織のトップにチョココンと飾り物のように乗っかっているだけで、事が起きたら、自分自身で驚いてしまって、えらいこっちゃ、取りあえず謝っておこう。幹部連中を従え、時には涙しながら『深く、深く反省し、徹底的に原因を調査し、対応いたします。心からお詫び申し上げます』礼!(これ何度か、リハーサルやってるんだらうなーと思いながら…)

今月の仏教講話は、真宗 大谷派 光念寺 本多正尚ご住職に来て頂いた。今回は新聞投稿の中からいくつか紹介された。最初は『今、夫が失業中で毎日家にいます。顔をあわせると喧嘩ばかりしていましたが、ある日、楽しく話し合う機会がありました。小さいころよく昔話を聞かせてやっていた子供が二人に気づき、「めでたし、めでたし」と言って後にしました。いか



厨房だより

管理栄養士 田村愛弓

11月も下旬になり、気温もぐっと寒くなってきました。紅葉や銀杏が鮮やかに色づき、紅葉狩りに行かれた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。私事ですが、そんな季節の中で私含め家族4人で人生初めての釣りに行ってきました。初心者用の釣り堀でしたので、初めての私たち家族でも鯛が16匹、はまちとかんぱちが1匹ずつ釣れました。持ち帰ってから刺身はもちろん、鯛めしや煮付け、塩焼きや照り焼きなど魚料理のフルコースでおいしくいただきました。やはり自分で釣ったと思う味は格別です。

季節ごとに旬の果物や野菜を狩りに行ける場所はたくさんあり、魚釣りも初心者にも優しく工夫されたところもあります。ぜひ皆様もご自身で旬の食材を狩りに行かれてはいかがでしょうか(釣りは難しいという方は、お近くの朝市で旬の魚を見て、お店の方と話しながら購入するのもおすすめです)。

に日頃は喧嘩ばかりしていたんだなーと心が痛みました』。次は『父と母が喧嘩した。最初に母が謝った。次に父が謝った。私が「いい親でよかった」といったら、お母さんが泣きだした。ゴメン、申し訳ないという心があったのだろう』。その次は『保育園から子供が「〇〇ちゃんと結婚する」といって帰ってきた。「結婚ってなに？」と聞くと、「二人で幸せになることなんや」。感動して「お父さんとお母さん結婚してるんだよ」と言ったら、「うそー!!」。よほど幸せそうには見られていなかったのだなーと心が痛んだ』。どうすればお互いのことを分かりあって、よい雰囲気を作りだせるのだろう。どこに、何に気が付けばそういう心になれるのでしょうか？最後におじいさんと孫の会話を紹介された。雪国の裏山。二人は木の下、雪の上で落ち葉を踏みながらエサを探す鳥をみつめていた。おじいさんが「エサが見つかるといいね」といった。遠くで「ごはんですよー」とお母さんの声がした。孫が「ぼくらはエサを探さなくても食事がとれるんだね」。おじいさん「いいことに気がついたね」。食卓の皿には魚がのっていた。その魚はどうやってこのテーブルの上に来たのだろう。その過程をいろいろと想像した。魚を買うにはお金が必要だ。お金を手にするには働かなければならない。それも多くの人の働きがあって、社会は成り立ち、潤っていく。普段は気にしていない大きな『おかげ』によって支えられている。それは人だけではない。魚だって自分より小さな魚を食べ、そのおかげで生きている。小さな魚ももっと小さな魚を食べ、もっと小さな魚はプランクトンを食べて生きている。プランクトンは滋養たっぷりの川からの流れがなければ大量に発生しない。川の滋養を生み出すには川を取り巻く豊かな環境が必要となる。庭の木の落ち葉がプランクトンに関わり、すべてのものがみんな今日の『いただきます』につながっている。人のおかげ、モノのおかげ。それは見えにくい、見ようとしない。「どんな時にそれを感じることが出来るのでしょうか。それは般若、すなわち光です。それが明るく見えて気づかせてくれるんです」と話された。なかなか通じないが、思いやりが通じ合う時がたまにある。そのためにも謙虚でありたいと、『下がるほど人を見上げる 藤の花』『実るほど頭を垂れる稲穂かな』ことわざを二つ紹介され、「お互いがよかったなといえる人間関係をもって下さい。残る2ヶ月そうやって生活してください。また、新年をそういう気持ちで迎えたいものです。真っ新しい新年を迎えたいものです。風邪などに気をつけて頑張ってください」。ありがとうございました。本年最後の講話は12月7日（月）の予定です。

【せいりょう園待機者状況 平成27年11月 6日現在】

○入所判定済み者 236人（グループの内）

Iグループ…61名 IIグループ…80名 IIIグループ…75名

【平成27年3月末迄の判定】

65点以上…17名 80点以上… 1名 90点以上… 2名

【平成27年4月1日以降の判定】

※このグループ分けは、県の「入所判定マニュアル」に基づき、緊急性を評価して分けています。Iグループが最も緊急性の高いグループとなっています。判定後、状況の変化がありましたら、ご連絡下さい。

平成27年4月より、県の「入所判定マニュアル」の制度が変わりました。

100点満点中、点数の高い方が入所対象となります。但し、直接本人・家族に話を聞いて、入所の緊急性を判断します。要介護1または2で、点数が65点以下の方は「非該当」となります。但し、介護の必要性・在宅介護の困難性が高い場合には、特例入所の必要性が高いと判断します。



テーマ「介護技術講習会」

今月は、家で必要な基本的な介護を、家庭にあるものを利用して行いました。実際に訪問看護・訪問介護で行っている介護方法です。せいりょう園の看護師が実技・演習を行います。

今回は地域の方々だけではなく、せいりょう園の介護職員、今後介護される側となるかもしれないケアハウス入居者の皆さんも参加していました。

介護の内容は、

- ① ベッドに寝たきりで動けない方のパジャマへの更衣。
- ② 寝たきりで動けない方のシーツ交換。
- ③ オムツ交換や着衣交換すると本人の位置がベッド下にズレてしまう為、上に引き上げる方法。
- ④ ベッドから起き上がり、椅子へ移乗する方法。

以上、4つの介護を実演しました。

ベッド上の介護では、介護する側が腰に負担をかけないように、電動ベッドで介護する人の高さに合わせます。腰痛ベルトを正しく装着する事も予防において大切です。

衣服は、身体にフィットしている服だと着脱の介護は難しいです。少し大きめの余裕のある服が望ましいです。

ベッド上で身体を引き上げる時、力任せにすると介護する側は疲れますし、される側は痛みを伴うかもしれません。肩から背中にかけてナイロン袋を敷くと摩擦を少なくしてくれるので、少しの力で引き上げ可能です。

ベッドに仰向けになっている方を横に向ける場合は、膝を立てて貰い、手は腕組みして出来るだけ身体を小さくして貰えると少しの力で横に向けることが出来ます。本人も怪我する可能性が低くなります。

介護方法に関しては、話を聞くだけでなく、見て、体験する事で理解が深まるように感じました。次回の「介護技術講習会」は、12月18日（金）14時～行います。内容は、「食事介助・口腔ケア」です。皆さんの参加をお待ちしています。



寝たきりの方のシーツ交換を実演する。



ベッドから椅子への移乗を行う。